予告・トルコ巡礼

〈パウロ伝道の地〉

「私はタルソ生まれのユダヤ人です」世界史上最も偉大な人物の一人であり、西欧文明の流れを変えたと言われるパウロ。新約聖書の「使徒行録」の中に、彼の言動が記されている。

パウロが生まれたタルソは、東トルコ・キルキア地方のエーゲ海に面した街である。熱心なユダヤ教徒であった彼は、キリスト教徒を迫害していた。

ダマスコに向かう途中、キリストの出現に遭い、突如、迫害者からキリスト教徒に変わった「パウロの回心」は、キリストを信じる私たちには有名な話である。

キリストの福音を伝える者となったパウロは、今のトルコ、ギリシャに三回、伝道旅行した。

そして、そこに生まれたキリスト教共同体に出した手紙が、新約聖書の中に十四通残されている。

その中にはエフェソ、カッパドキア、コロサイなどの今のトルコ国内の地名がぞくぞく登場する。

トルコはパウロ伝道の地であり、トルコを訪れることは、私の長年の夢であった。

今、連載している南スペイン、ポルトガルの巡礼記も間もなく終わるが、そのあと「トルコ巡礼記」を続けるため、五月末から十五日間、トルコを旅した。

バスで全行程四千五百キロの旅は、日本の国土のほぼ二倍の地をパウロの足跡を訪ねて走り回った。

帰国した今、ミサの中でパウロの手紙が読まれるたびに胸が熱くなる。

パウロの足跡だけでなく、トルコはネアンデルタール人に始まりヒッタイトなどの紀元前から、オスマン・トルコの世界制覇に至る人類の歴史が残された国である。

東洋と西洋の十字路と言われる、かつての首都イスタンブールは、トルコのイスタンブールではなく、世界のイスタンブールである。地下鉄を建設しようとしたらあちこちで遺跡にぶつかり、工事は中止された。トルコは遺跡の上にあるとも言える。

パウロが伝道した紀元五〇年ごろの街は、遺跡として残っているが、今、そこにはだれも住んでいない。残っているのはパウロの言葉だけである。

イスタンブールのブルーモスクの前で
＝サングラスと帽子は必需品

〈イスラムの国〉

トルコはイスラムの国である。どこに行っても国旗がはためいていた。

第一次世界大戦でオスマン・トルコは崩壊した。

今のトルコは、ギリシャ、ブルガリア、シリア、イラク、イラン、アルメニア、グルジアと国境を接し、日本のような島国では考えられないほどの国土に対する意識が、ひるがえる国旗に表されているように思えた。

カタールの首都、ドーハ経由でトルコを訪れたが、飛行機の中で高度や速度が表示されるたびに、イスラムの聖地メッカの方向とそこまでの距離が表示されるのには驚いた。トルコをはじめ中東はイスラム教の国なのだと改めて痛感させられた。

魅力あふれるトルコについて、これから巡礼記を書きたいと考えている。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

カッパドキアにはさすがに国旗はなかった